様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３０１０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００５２４

研究課題名（和文）柳宗悦による朝鮮フィールド調査と朝鮮民芸言説の近代性に関する研究

研究課題名（英文）Soetsu Yanagi's field research in Korea and research on the modernity of discourse on Korean folk art

研究代表者
梶谷　崇（Kajiya, Takashi）

北海道科学大学・未来デザイン学部・教授

研究者番号：１０４０５６５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：昭和初期の柳宗悦らの朝鮮踏査のテクストの分析を通し、大正期の朝鮮工芸美論からの変化について明らかにした。柳の大正期の朝鮮工芸言説では日本や中国との対比から朝鮮民族としての独自性を強調する傾向があった。それに対し、民藝運動開始後の昭和初期は、次第に個別の生産地や産品への注目に変わる。近代化する京城を批判的に見つつ、全羅道といった周縁部の民藝の村にノスタルジックなまなざしを向け、民藝を生産するユートピアを重ね合わせた。このような視線は、日本国内の民藝踏査を経た彼らの視点が朝鮮半島に持ち込まれたものだ。地方に同情的な視線を向けつつも、朝鮮の産地は民藝の理想郷としての意味を付与されていった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
柳宗悦の朝鮮工芸に関する言説研究は概ね朝鮮民族美術館が設立された大正期の言説分析に集中し、民藝運動開始後の昭和初期についてはそれほど研究の蓄積がなされていない。本研究テーマはその不足を補うことに第一の学術的意義がある。
また民藝運動と朝鮮工芸言説との関係性から柳の工芸美論をどのように評価するのかという点についても従来あまり分析の対象とはされてこなかった。朝鮮に対する柳の言説は大正から昭和までの全体を通して評価されてきたが、本研究では民藝運動が開始され彼らが日本国内の民藝調査をすることで得られた視点や民藝産地への眼差しが、朝鮮言説に反映されていることを明らかにした。この点が第二の学術的意義である。

研究成果の概要（英文）：Through an analysis of the text of Soetsu Yanagi's survey of Korea conducted in the early Showa period, I examined changes from the aesthetic theory of Korean crafts in the Taisho period. Yanagi's discourse on Korean crafts during the Taisho period tended to emphasize the uniqueness of the Korean nation in contrast to Japan and China. In contrast, in the early Showa period, after the Mingei movement began, he gradually began to focus on individual production areas and products. While taking a critical look at the modernizing Seoul, he also turned a nostalgic gaze to the folk craft villages in the periphery of Jeolla Province, overlapping them with a utopia of folk craft production. This perspective was brought to the Korean peninsula from their perspective after researching folk art in Japan. While he saw the value of the regions of Korea as folk craft production areas, he also gave them the meaning of a folk craft utopia.

研究分野：日本文化研究

キーワード：柳宗悦　民藝　朝鮮　フィールドワーク

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

柳宗悦の朝鮮工芸に関する言説研究は概ね朝鮮民族美術館が設立された大正期の言説分析に集中している。柳宗悦の大正期に発表されたテクストや当時の『東亜日報』等の朝鮮側の新聞雑誌メディア報道を対象として、同時代言説の中において柳の朝鮮工芸美論を位置付けるといった言説分析の試みが多く発表されている。また、柳と活動を共にした浅川伯教・巧兄弟、柳兼子、南宮璧ら廃墟派などの朝鮮人青年知識人層との人的連携の中での活動実践の評価という側面からの研究成果もなされてきた。柳の活動実践は、評価はさまざまに分かれるものの、日本の植民地政策に対する抗議と、朝鮮民族およびその文化に対する擁護、民族間の連帯の呼びかけとして位置付けられている。

一方、昭和期に入ってからの柳と朝鮮との関係についての研究蓄積は多いとは言えない。1923（大正 14）年の朝鮮民族美術館の開館後、柳の関心は木喰上人研究に向けられ、またそのための日本国内の調査旅行を通じて日本各地の民藝の「発見」へとつながっていく。民藝運動の展開のプロセス、またそこで繰り広げられた諸言説の分析についても多くの研究者によって成果が報告されている。

だが、大正期の朝鮮工芸論と民藝運動開始後の朝鮮工芸論との関係性、連続や断絶については十分に検討されているとは言えない。民藝運動後も柳にとって朝鮮工芸は変わらず興味関心の対象ではあった。1931（昭和 6）年には機関誌『工藝』が創刊、1936（昭和 11）年には日本民藝館が開館、1939（昭和 14）年には『月刊民藝』が創刊する。柳は朝鮮での民藝調査で得られた朝鮮の民藝品を民藝館における展示や機関誌を通して多くの人にその価値を紹介していった。だが、そこで語られる柳の朝鮮工芸に関する言説は、大正期の言説に見られた抗議や連帯の呼びかけ、朝鮮文化の擁護といった文脈とは異なった位相にあるものであり、民藝言説の中で語られている側面も観察される。また大正期における朝鮮人知識人たちとの関係は徐々に後退していくあり様も見られる。本研究テーマは大正期の言説や柳の朝鮮工芸観と対比しつつ、従来研究対象としてあまり扱われてこなかった昭和初期の朝鮮工藝言説および柳らの実践活動に注目して検討を行うものである。

２．研究の目的

1920 年代、植民地下にあった朝鮮の工芸品の美を見出した柳宗悦は、朝鮮各地をめぐる実地踏査を通してその朝鮮美術論を展開させた。柳は朝鮮各地を踏査し、日常で使用される工芸品の中に、近代化以前の美を見た。柳は次に日本の伝統工芸にも同様の目を向け、日本中を踏査する。柳の朝鮮美論および民藝美論は、人文学的な体系化に一つの特徴を見ることができるが、その一方でこのような文化人類学的なフィールド調査という調査手法によっても体系づけられるものであった。

したがって本研究は、柳宗悦や彼らと行動を共にした濱田庄司や河井寛次郎といった民藝派の人々がどのようなフィールド調査を行なったのか情報を整理することを第一の目的とする。そしてその過程でいかにして朝鮮美術論が形成また変容していくのかを整理すること。また最終的に民藝運動へとどのように結びつき、民藝美論、民藝言説とどのように接続、包摂されていくのかということを考察することが第二の目的となる。

大正初期に李朝陶磁器に魅了され、その後ウィリアム・ブレイク研究や中世キリスト教神学の研究を通じて神秘主義美学を経由し、1919（大正 8）年の三一運動を契機に朝鮮に関する政治的・文化的な言論活動、文化実践活動を経ながら、柳の中で朝鮮の美はさまざまに位相を変えていく。こういった関連する柳の思想、実践活動の分析を並行して行いつつ、その中で柳がなした昭和初期の朝鮮のフィールド調査とはいかなる営為であったのか。これら一連の言説、実践の分析を通して柳思想の近代性を問い直すことが本研究の最終的な目的である。

当初以上の見通しで研究を計画していたが、本研究開始年度末から新型コロナ感染症の拡大により韓国での訪問調査が困難となった。そのため、研究方法を変更して、上記の目的について日本国内での可能な史料調査・収集を中心に行うこととし、それに加えてそれに関連性の深い日本国内での柳らの活動（日本国内での朝鮮民族美術館設立運動に関する音楽会イベントや新潟県の民藝運動支援の動き）にも焦点を当てた。朝鮮でのフィールド調査とは直接的には関係しないが、上記の最終的な目的を達成する上で、大正から昭和への柳の朝鮮工芸への関わり方を総体的に捉える重要な視点であると考えている。

３．研究の方法

大正期から昭和にかけて日本および韓国において刊行された雑誌新聞記事の収集分析が主なものである。

民藝関係雑誌は『工藝』『月刊民藝』『民藝』といったものと関連する工藝関係の雑誌が対象となる。復刻版や国会図書館デジタルコレクション等を通じて資料を検索、収集作業を行い、分析の一次資料とした。

日本国内における新聞雑誌については『朝日新聞』『読売新聞』等全国紙や『北海タイムス』

『函館新聞』『函館毎日新聞』『函館日日新聞』『小樽新聞』『越後タイムス』『新潟毎日新聞』『山陽新聞』等の地方紙、また『改造』『白樺』『音楽会』といった雑誌類にあたった。全国紙以外は電子化やデータベース化が十分ではないものも多い。その場合は国会図書館や各地地方図書館へ出向き資料調査を行った。

韓国で発行されている新聞類は『東亜日報』『朝鮮日報』『東明』等がある。これらは電子化が進み日本国内からでも閲覧可能なものが多い。韓国歴史編纂委員会 HP 等を中心に検索・資料収集作業を行った。

他、日本民藝館や地方民藝館、関連する資料館等を訪問し館長や学芸員からの情報や資料の提供を受けた。

以上の方法で一次資料を綿密に調査し、それらを総合して柳らの当時の活動の様子を再構成しつつ、言説を分析した。

４．研究成果

(1) 柳宗悦「全羅紀行」の検討

1936 年と 1937 年の 2 度、民藝調査を目的として朝鮮半島を旅行している。河井寛次郎と濱田庄司が同行しており、また現地においては朝鮮工芸会のメンバーが合流している。本研究ではこのうち「全羅紀行」によってその様子が下記残されている 1937 年 5 月の旅行について分析を行った。

「全羅紀行」は旅行が実行された翌年の 1938 年 3 月発行の『工藝』82 号に掲載されたものである。本文は柳、河井、濱田の 3 名共同執筆とされているが、文体や書かれている内容から概ね柳宗悦の執筆によるものと推測される。

記述から柳ら一行がどのような経路、交通手段を使って移動しているのかを表 1 のようにまとめた。旅の目的は朝鮮において今なお生産されている民藝品の実地調査である。同時にこの旅行には高島屋やたくみ工芸店の支援があり、朝鮮工芸の買い付け旅行的な性格が強い。柳は各地を巡りながら大量の商品を購入している。また柳は訪問先で土地の有力者や道知事などの為政者とも頻繁に面会し、意見交換を行なっている。この旅行自体全羅道庁から派遣されたガイドが随行し、移動も公用車を用いている。彼らの旅行は行政側からの要請・協力によるものでもあったと考えられる。

この記述から読み取れる柳の言説の特質を整理すると以下の通りになる。

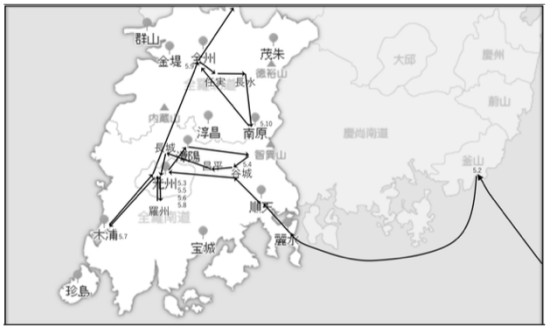
朝鮮の地方には美しい村が多く残存している。柳がここで言う「美しさ」とは自然と生活が一体化している状態である。そこでの時間の流れは緩やかであり、人々は前近代的な生活を当たり前のものとして受け入れている。概ね街道筋から離れた場所に位置しており、その分近代化の影響を受けづらい。そういった美しい村、集落で生み出される手仕事の工芸品も必然的に美しいものとなる。

一方柳は土地の日本人為政者との対話の中でそのような美しい村の価値や手仕事の伝統文化を存続させることの重要性を説くが、対して為政者側からは前近代的な生活様式が衛生面において課題があることが指摘されたりして彼らの間に認識の一致が見られない。

柳は逆に「自然」から遊離した日本人の近代的生活や生産様式にこそ「病」が宿るとし、京城などの都市部は徐々にその近代性に侵されてきていると朝鮮の近代化も非難の対象としている。これらの認識は、例えば九州日田小鹿田焼の里への訪問を記した『日田の皿山』なのど紀行文にも同様に見られるものであり、柳の民藝の生産地や生産者に対するプリミティビズム的性格を如実に示すもの

表 1 1937 年における旅程

日程	行程（二重下線は人名）
5 月 2 日	柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司一行、釜山上陸（濱口良光、土井清一と合流） 竹下隆平宅（朝鮮瓦などの収集家）を訪問→陳列所見学、市場→（海路・船中泊）
5 月 3 日	早朝麗水着→順天（道庁の自動車、案内役の孫鎬度と合流）、郡守具滋璂に面会。具氏の案内で徐丙奎宅を見学→谷城、郡役所の藤本稲城に迎えられる。→竹谷面下汗里窯場を発見、市場→光州、松本知事主催の歓迎会（内務部長、府尹、湖南銀行頭取玄俊鎬らの歓迎を受ける）→光州泊（泉屋旅館）
5 月 4 日	光州→潭陽、竹細工の村（櫛を作る家を見学、温突部屋に朝鮮着物を着て作業をする 3 人の女性＝「唐時代の絵としてより以外に受け取れない」）→智異山華厳寺、木工漆器を見る→谷城泊（谷城館）
5 月 5 日	谷城→梧谷面梧枝里、面長安圭善宅訪問、村の美しさに感嘆する→竹谷面下汗里窯場見学（焼物数百個を発注）→昌平、市場見学（「赤鰯の塩漬け」＝「病菌以前の生活」として賞賛）→長城、紙業地、紙業組合理事李延善の案内で作業場を見学→李秋風宅訪問、歓待を受ける→帰り居酒屋で見かけた白磁に惹かれる（五百個発注）→光州泊（泉屋旅館）
5 月 6 日	光州→羅州、羅州盤の名工、李鎬奎の工房を見学→栄山浦→南平、市場を見学→光州、松本知事により、柳らを囲む内鮮人の座談会が催される。「朝鮮人に朝鮮の品に自覚を持つこと、為政者にはそれを尊重し生長させる任務があること」を主張→光州泊
5 月 7 日	光州、大市日（大量の民藝品を購入。市場の近代化を嘆く）、昼食玄俊鎬宅へ招待、松本知事同席。→濱口良光帰城→羅州、市場（古い面影を賞賛。いくつかの民藝品を購入）→木浦、儒達山の風光を賞賛→木浦泊
5 月 8 日	木浦、公設市場を見学（木工品、竹工品、陶器等を購入）→昼食、府尹増田道義から饗応を受ける。増田氏は著作から柳を知る。）→多侍面、市場見学、多侍木綿を購入→光州泊
5 月 9 日	光州→（鉄道）→裡里、市場見学、案内役の孫鎬度と別れる→（鉄道）→全州、商工奨励館（館長高津氏の好意で見学）→全州泊（銀杏屋）
5 月 10 日	全州、道庁を訪問（松本光州知事の紹介により、孫知事、金産業課長に面会、全羅北道内の移動のため自動車と案内役（朴衝鎬）の提供を受ける。朴衝鎬は柳の講義の受講者で、著作の愛読者であった。）→途中、楮を漉く仕事場を発見し見学→任実、市場見学→長水面（石器で有名）、郡守林明珣面会→南原泊（菊水旅館）
5 月 11 日	南原→雲峰（山内面）、木器、刺物で有名、仕事場見学→立石里、実相寺訪問→全州、市場見学（有り余るほどの買い物）→（鉄道）→京城
5 月 12 日～16 日	京城滞在（京城ホテル）　日本の安物や日本から輸入された朝鮮風のものばかり売られる現状を嘆く。また朝鮮で作られたものでも日本人が経営するものは死んでしまう、と批判。



「全羅紀行」より筆者作成

(2) 新潟県と柳宗悦

新潟県と柳宗悦は二つの人脈ルートによって結ばれている。

一つは新潟医専の学生団体であったアダム社とのつながりである。1920 年頃、主要メンバーであった式場隆三郎と吉田璋也は『白樺』に傾倒しており、武者小路実篤の新しき村への取り組みや柳の朝鮮民族美術館設立運動に共鳴し、この地域での支援団体として活動した。その後、式場、吉田ともに民藝運動家として柳の運動を支えた。

もう一つは新潟県柏崎市の吉田正太郎ら『越後タイムス』に集った地元の青年実業家、文化人集団である。彼らは『越後タイムス』を活動の拠点としながら、地域の文化活動を主導していったがその中で柳の朝鮮民族美術館設立運動や木喰上人研究、さらに民藝運動の地方での支援者となっていった。

本研究課題においては新潟県とのつながりにおいて以下の二つの側面に着目しながら調査研究を進めた。

2-1 柳兼子音楽会と新潟県

1920 年から柳宗悦は朝鮮への理解促進や文化交流、文化振興を目的として講演会や妻兼子の音楽会活動を日本国内で展開していった。それらは『白樺』や『改造』誌上での言説を通して全国の支持者たちに予告や報告がなされていった。その中の一つである柳の「彼の朝鮮行」(『改造』1920 年 10 月）は従来、柳宗悦の朝鮮に関する文化事業を妻兼子が後援するもとという位置付けがなされていたが、当時の柳兼子の音楽活動（特に地方における活動）については不明な点が多く残されていた。今回それらの資料の追跡調査を行い、東京、函館、小樽、札幌、新潟、大阪、岡山と巡回された一連の兼子の音楽会は、多くは彼女自身の音楽家としての活動であったことが判明した。ただし、そのうちの東京と新潟で開催されたものは夫宗悦の文化活動を後援するものであることも確認された。新潟において音楽会を主催したのが先述のアダム社であった。同時期吉田璋也は新しき村新潟支部を設立しており、武者小路実篤の講演会も主催している。新潟の学生団体が徐々に武者小路や柳宗悦らの白樺シンパとしての活動を本格化していく過程が確認できるし、式場、吉田はその後、信州や東京を訪問して『白樺』を中心とした人的つながりの中に加わっていく。

2-2　吉田正太郎と柳宗悦

1920 年代に柳宗悦は別の人脈ルートから、新潟県柏崎市の越後タイムスに集った文化人たちとの交流を始めている。その中心人物の一人であり柏崎の呉服店の 3 代目であった吉田正太郎とのつながりやその思想的影響関係については十分に明らかにされていなかったが、本研究を通じてその人脈関係について資料をもとに検討した。

バーナード・リーチ、富本憲吉と工芸家とのつながりをもっていた柳は、リーチ、富本の支援者でありコレクターであった新潟県糸魚川の素封家伊藤助右衛門を通じて吉田正太郎らと交流を始めた。1920 年前後のことである。吉田の書き残したテクストからは、当初吉田は白樺に関心を向けつつも、最初から柳の活動や思想に共鳴していたわけではなかったようである。だが、柳が佐渡における木喰上人の調査の帰途に柏崎に立ち寄り、面会を果たした両者は一気に打ち解ける。その後柏崎地域の木喰上人研究においては吉田が全面的に協力支援し、柳の調査時は必ず同行し現地を案内した。柳の民藝運動は、こういった地方の文化人との交流が大きな機縁となっていたり、支援者としての輪を広げるきっかけになっている。吉田はその後も柳の活動への理解を示し、民藝運動に対して経済的な支援も行った。

ただし、例えば式場隆三郎や吉田璋也のように直接的に民藝運動の実践者となるのではなく、吉田正太郎の場合は地方からの思想的な共鳴や経済的な支援という形をとった。その背景には

柳の思想において民藝の作り手は、前近代的な村落や集落における工人の生業としての手仕事から生み出されることを一つの理想型としていたのに対し、吉田は工芸の「余技」的に生み出される側面にも注目しているといったように、思想的なズレも内包していたことが考えられる。吉田は自らも篆刻、書画、デザインを行うといったいわば地方の旦那衆的な趣味人でもあった。吉田にとって地方で生み出される工芸品は、地方文化人の創作活動によるものでもあり、それが文化的中心部から離れた地方都市における文化活動でもあるとみなした。それを吉田は「余技」と呼び価値を主張している。吉田は民藝運動に理解を示し援助もしつつも、一方で北大路魯山人や版画家川上澄生との交流も続けている。吉田のコレクションは現在柏崎コレクション・ビレッジ内に所在する『黒船館』に所蔵されているが、それらは民藝とは性格の異なる日本の江戸末期、明治初期の開化期資料（泥絵や石版画など）や川上澄生作品などによって構成されている。柳も吉田もその芸術的感性や思想は異なっていたが、終生互いを尊敬し交流を続けた。柳の文化的実践活動（朝鮮民族美術館や木喰上人研究、民藝運動）はこういった地方の理解者、支援者たちとの人的交流を通じて深められていったのである。

本研究を通じて、従来あまり詳にされて来なかった新潟における上記２つの人脈ルートを資料を用いてたどり、民藝運動の新潟を中心とする人脈形成の一面を明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 梶谷崇	４．巻 24
２．論文標題 柳兼子の北海道における音楽活動 ： 東京混声合唱団の分析を通して	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本近代文学会北海道支部会報	６．最初と最後の頁 46-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 梶谷崇	４．巻 24
２．論文標題 民藝美の基層 ： 柳宗悦の自然概念	５．発行年 2021年
３．雑誌名 有島武郎研究	６．最初と最後の頁 58-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 梶谷崇	４．巻 49
２．論文標題 柳宗悦「彼の朝鮮行」と柳兼子独唱会 ―朝鮮文化事業における行為遂行的メディア戦略―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 北海道科学大学紀要	６．最初と最後の頁 29-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 梶谷崇	４．巻 51
２．論文標題 民藝派による昭和初期における朝鮮民族調査に関する研究ーー柳宗悦「全羅紀行」の検討を通してーー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 北海道科学大学研究紀要	６．最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 梶谷崇	4．巻 51
2．論文標題 地方文化振興の担い手としての地方文化人の役割 ―吉田正太郎における「余技」と柳宗悦との交流―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 北海道科学大学研究紀要	6．最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 梶谷崇
2．発表標題 柳宗悦再読ー底流する神秘主義
3．学会等名 2022年度日本比較文学会北海道大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 梶谷崇
2．発表標題 民藝のコミュニケーション
3．学会等名 2021年度第1回日本比較文学会北海道研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 梶谷崇
2．発表標題 民藝思想の基層としての自然
3．学会等名 有島武郎研究会
4．発表年 2020年

１．発表者名 梶谷崇
２．発表標題 柳宗悦による朝鮮陶磁器踏査と規範学としての民藝
３．学会等名 日本比較文学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関